R4　春期講演会　大会報告

文責　3年　筒井誠也

　令和4年度文化財学会春期講演会は、6月4日（土曜日）に「仏教・道元・寺院―一研究者の学んできたこと―」と題し、2020年まで12年にわたり宗教学などを担当され、現在は曹洞宗養国寺と東泉寺の住職を務められる、本学元教授の下室覚道氏を講師に迎え、対面とオンラインを併用したハイブリッド形式にて開催された。

　講演の冒頭では、2020年より感染拡大が続く新型コロナウイルスの現状と関連して、奈良時代の天平の疫病やギリシアのペロポネソス戦争、また14世紀の欧州におけるペストの流行など、古代の感染症の被害について紹介された。そして、降りかかる災難は、欲・怒り・無知といった煩悩に人が圧倒された時に起こるもので、全て人の業（ごう）によるものとの理解が示された。また、災難を越えた後の時代における技術的・文化的な人類の発展を例に、災難によって受けた絶望の後に、人が希望を生み出すことについても示された。

　講演の前半では、仏教をテーマに下室氏の仏教研究における学びについて話された。まず、宗教を研究する際、その定義は様々で宗教学者の数だけ存在することを示され、その一例として、岸本英夫氏の「宗教とは人間生活の究極的な意味を明らかにし、人間の問題の究極的な解決に関わりをもつと、人々によって信じられている営みを中心とした文化現象」という定義、また岸本氏が研究の立場として、宗教を主観的立場から研究する神学的研究・宗教哲学的研究、客観的立場から研究する宗教史的研究・宗教学的研究に分類したことが紹介された。そして、このことが示すように宗教学には様々な立場があり、信仰心を持って研究する場合もあれば、無神論者としての立場で研究するなど、人によって宗教を見る視点というのは異なることが説明された。この例として、岸本氏もキリスト教信者の父がいたが、自身は享年の60歳まで癌との闘病生活を送りながら無宗教を貫き、著書であり闘病記録の『死を見つめる心』にそれを綴ったことを挙げられた。このような様々な立場を取る宗教学は、19世紀後半の欧州諸国が植民地支配を行う過程で、多様な宗教との邂逅よってそれらを人々が比較・検討し研究する中で成立した学問であると説明された。これに併せて下室氏の専門とする仏教学も、19世紀中頃に欧州で誕生したインド学から派生して成立したもので、日本では明治の廃仏毀釈や欧州の研究の影響により、大学で仏教学が講義されるようになったこと、そして仏教学には宗派ごとに教義・歴史を研究する「宗学」が存在することについても説明された。また戒律について、他国の宗教者が厳しい戒律に身を置く一方、日本では戒律は厳格に守られているものではないことが紹介された。その理由として、宗教の精神性を重要視する日本人の特徴が現れている点や明治5年に公布された太政官布告133号により、肉食・妻帯・蓄髪といった僧侶の制限が解除されたことなどが要因であると説明された。また、この宗教の精神性と関連して、大学のアイデンティティでもある建学の精神や宗教と大学の関わり、先人の研究、下室氏の体験などを例に大学や学問の精神、学問への向き合い方について示された。

　講演の中盤では、曹洞宗の祖である道元禅師について話された。ここでは下室氏の研究者としての立場から、主に高等学校の教科書における道元禅師や曹洞宗・臨済宗に関連した記述について講評された。また、道元禅師と自己を重ね合わせるというテーマでは、下室氏が研究してきた道元禅師の教えや精神性の魅力について、仏教との出会いの話も交えながら示された。

　講演の後半では、寺院と文化財をテーマに話された。近年、少子化による人口減少や過疎化によって文化財の継承が難しくなっているが、寺院もその例外ではなく、各宗派約30～40％の割合で寺院の消滅が起きていることが紹介された。下室氏も葬儀の件数の増加から高齢化の高まりを感じ、この波が過ぎた後の人口減少を危惧されていた。また、新型コロナが寺院に与える影響も大きく、寺院やその文化財の継承また寺院の運営などの問題について、寺院が今後どのようにその運営形態を変化させていくかについて考えを示された。そして具体例として、下室氏が住職を務められる木更津市の東泉寺、新宿区の養国寺やその他の宗教施設を示され、これら寺院の概要や、文化財の継承について紹介された。

講演の最後には、近年の若年層を取り巻く環境、人生の変化について養老孟司氏の言葉を紹介され、締めの言葉とされた。